

## サリー・グリーングロス

Sally Greengross

ILCグローバル・アライアンス共同理事長・ILC英国理事長

ILC英国一同、老年学、精神医学、老年医学分野の世界的リーダーのロバート・バトラー博士の突然の逝去に、深い悲しみに包まれている。彼の死によって私たちは、エイジングの政策、診療、研究に類まれな影響力を持ち、世界中でその名を知られた人を奪われてしまった。

彼の死は、ILC英国理事長である私に、いっそう深い喪失感を与えている。個人的に彼は30年来の友人であり、また、世界各センターのILC「ファミリー」の創設者であり、我々を鼓舞する人だった。彼と奥様が英国に滞在するときは、度々我が家で過ごしたものだ。彼の家族と知り合い、その温かく誠実な友情の恩恵を受けることができた。

また私はボブが、貧しい幼年期を過ごしたこと、結果的に祖父母に育てられたこと、その祖父母が間違いなく彼に信頼と愛情を吹き込んだことを知った。偏見と差別が多くの人に影響を与えている社会で、高齢者が尊厳を持って生き、十分に能力を発揮できる必要がある点を強調する決意をさせたのは、たぶんこの愛情であった。米国のナーシング・ホームにおける高齢者処遇の実態調査に基づき、そのあり方を批判し、社会に警鐘をならした“Why Survive? Being Old in America”は、その後の彼の生き方を決定するうえで大きな役割を果たしたと言える。彼はすでにこのときから、常に物事を良いほうに変革しようと決意していたのだ。

ボブと知り合ったのは、彼がNIAの初代所長だったときだった。NIAでは、莫大な仕事を成し遂げ、さらにポジティブな高齢者のQOLの実現に向けた決意のもとに彼が生涯にわたり、優れた実践を示し、あらゆる可能性に挑戦し続けたことは、膨大な数の研究・一般書、論文、講演その他提言などの形で残された。近年はこれにILCの研究

政策の分析が含まれるようになった。これは、米国だけではなく世界中の高齢者の状況の改善に役立った。私は多くの国で彼とともに議会や議会委員会で証言し、ともにプラットフォームを共有する恩恵にあずかり、また、国連、WHOその他の政府間の機関に対して、改善をもとめて力強く議論を展開するのを目の当たりにした。こうした彼の活動は、自国および世界における人口の変化が私たちに及ぼす利点や課題について、世界全体でさらに認識を深めることにつながった。

彼は多くの高齢者が尊厳の喪失を体験している事実を怒りを覚え、そのような否定的な考え方、そして、そうした考え方が、市民社会の膨大な資源であると同時に、国の経済の原動力と考えられるべき人口層に与える悪影響を表す「エイジズム」という言葉を創った。

彼がワシントンの「高齢化に関するホワイトハウス会議」で議長を務めるのを見て、人々が彼に抱いた好意、そして彼が極めて正当に集めた賞賛や尊敬がよく理解できた。彼は、孫をガラパゴス島へ連れて行ったり、私たちと一緒にロンドンの景勝地や歴史的建物を見て歩いたり、常に家族や友人と過ごす時間を大切にしていた。

ボブ・バトラー博士に十分な敬意を表するためには、私たちには、彼が信念を持って熱心に取り組んできた活動を引き続き推進し、社会の高齢化はまさに賞賛に値すること、現代社会では高齢者には富と繁栄を促進する潜在能力があり、単なる「負担」ではないことを示すためにさらに努力する必要がある。私たちだれもが、たとえ何歳になろうと、目的や生きがいのある生活を維持する必要がある。

この目標を達成するために私たちが連携できるのはボブ・バトラー博士のおかげである。